萬葉集大成

1 總記篇

平凡社版

萬葉集大成（第一卷）

昭和二十八年三月二十日　印刷
昭和二十八年三月二十五日　發行

總記篇
都内定價五百圓
地方定價五百二十圓

編集兼發行者　東京都千代田區四番町四番地　下中彌三郎

印刷者　東京都千代田區四番町四番地　塩原康人

發行所　東京都千代田區四番町四番地　株式會社　平凡社

所刷印社立共　〇一の三町保神田神田區田代千京東

總記篇目次

萬葉集の歴史的地盤……高木市之助　三
萬葉集の地理的環境……坂本太郎　三
古事記と萬葉集……山田孝雄　四九
萬葉集の成立……武田祐吉　七七
萬葉集編纂目的の考察……尾山篤二郎　二三
萬葉集の卷々の性質……澤瀉久孝　一四三
萬葉集の美と思潮……岡崎義惠　一七七
萬葉集の歌躰と風格……久松潛一　二〇一
萬葉集と歌風の變遷……風卷景次郎　三三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

萬葉傳說歌考……松村武雄　二五三
萬葉集の歌語……吉澤義則　二七五
萬葉集と民俗學……肥後和男　三〇三
萬葉集と方言……東條操　三二七
萬葉時代の美術……野間清六　三五五
日本の文化的性格と萬葉集……長谷川如是閑　三七七
總記篇跋……久松潛一　三九七

總記篇

編集委員

澤瀉久孝
小島憲之
佐伯梅友
高木市之助
久松潛一
正宗敦夫
尾山篤二郎

萬葉集の歴史的地盤

高木市之助

まへがき

本大成では別に歴史社會篇といふ一卷を設けて、萬葉集と上代文化、同上代政治、同上代民族等の諸關聯をそれぞれ專攻の立場から檢討する事になつてゐる。隨つて此の總記に於ける私の扱ひ方はどこまでも總記的な、――といふ事は萬葉集を支へてゐる地盤としての歴史一般といふ角度から考へて行く事になるであらう。唯併しその事は概論的に萬葉集といふものを遠くから眺めてゐるといふ事とは限らない。私のやうな國文學者の日常の仕事は萬葉集にぴつたり接觸してその接觸面で色々發見したり掘り出したりしようとするにある。だからいくら歴史一般といふ事を考へるにしても萬葉集との距離がその爲に遠ざかるといふ事ではない。本稿を讀んで頂けば分ることであるが、讀者に豫めあらぬ期待をかけさせないために一言ことわつて置く次第である。

もう一つ、萬葉集の歴史的地盤を考へるといふ事は萬葉集を歴史的に觀ようといふ事ではない。この事は萬葉集を一個の文學として觀るといふ私の根本的立場を變へることでありたくはない。問題はどこまでも文學としての萬葉集であつて他のどのやうな萬葉集でもないけれども、唯文學を單に文學としてのみ考へようとする孤立的な考へ方が一番純粹な文學的操作であるといふ風に私は考へない、むしろ逆に萬葉集をその歴史的地盤から引離して考へようとす

る考へ方こそ却つて萬葉集を眞に文學として考へる考へ方から遠ざかるものと私には考へられる。つまり萬葉集の歴史的地盤を考へるといふ事はそのまゝ集を文學として考へることそれ自體なのである。

一

私は今、萬葉文學の中から二三の具體的作品を選び出して來て、その歴史的な基盤といふものが凡そどのやうなものであるかといふ事を文藝論的立場に立つて明かにしてみたい。

萬葉集卷二の一九九番と二〇一番にまたがつて「高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌」と題する歌が載つてゐる。題詞通り長歌一首と短歌二首から成り、中でも長歌は一四九句からなる集中最長の詩篇として有名である。ところで本歌は萬葉の色々の性格を代表し、隨つて此の大成の中でも多分諸家によつてくりかへして例出されることであらうが、例へば〃殯宮の時の歌〃と題詞にあるが、それは萬葉集の特に卷一、卷二のやうな卷ではその編纂が勅撰に準じて考へられる程に作歌の配列に秩序があり、部立が整つてゐる事は周知の事實であるが、この殯宮の時の歌といふのは此の卷二の挽歌の部類に屬する歌で、同じ挽歌でも自分の妻の死を悲しんで作つたりした挽歌とは著しく性格を異にし、皇子や皇女が亡くなられた場合に、宮廷で執行される葬儀に際して、半ば儀禮的に作られるのが此の種殯宮の時の作歌などと題される挽歌であるとするのであつて、此の高市皇子尊の挽歌などはかうした宮廷挽歌の代表的な作として特に重要に考へられる。

又例へば本歌はこれも題詞にあるやうに柿本人麿作歌であるが、人麿は周知のごとく、「山柿之門」と、大伴家持が同じ萬葉集中で書いてゐるほどに萬葉を代表する專門歌人であるが、さうした人麿の作歌中でも本歌などは、特に彼の個性をよく表現し得た一流の作であると言はれる。つまり天才人麿を證する代表的作品であるといふ事に定評がある。

ところでそのやうな樣式的關聯は單にそれだけを切り離したのでは眞の意味では樣式ではないし、個人人麿にしても唯個性を比べあつて、そこに赤人でも憶良でも乃至は貫之でも定家でもないといふやうな特異なものを探すといふだけでは人麿といふ人間は見出されない。かうした樣式なり、個性なりが考へられる基盤として歷史的なものが考へられなくてはならない。それがこゝで採りあげようとしてゐる萬葉集の歷史的基盤なのである。

もう少し具體的に考へて行くとかういふ事になる。先づ挽歌の場合であるが、卷二の挽歌の部に收められてゐる、かうした「大殯之時歌」と題詞にあるもの、或はこれに準ずるものは長短併せて（反歌は長歌と併せて一首と見て）三十餘首乃至四十首にも及んでゐる。そこで是等の歌が或る儀禮的關聯によつて作られ、うたはれた作歌であらうことを推測する事は誠に當然な事である。併しながら問題は此のやうな推測が歌の實體にどれだけ關聯するかといふ事にある。歌の實體に於てどのやうに人間が殺され、歷史が凝結してゐるかといふ事にある。假に當時宮廷の「大殯の時」に此のやうな挽歌を奏する慣例が行はれ、現に是等の歌が儀禮的に奏せられたとしたも、その故に是等の歌を類型的な形式歌として斥ける事は出來ない。要は歌そのものの實體に係るであらう。ところで實體を見てみるに「殯宮之時の作歌」は人麿作に關する限り、類型的な形式歌ではない。人麿の「殯宮之時」の作歌は卷二に三首收められて居り、主人公は日並皇子尊（一六七・一六八・一六九・一七〇）明日香皇女（一九六・一九七・一九八）高市皇子尊（一九九・二〇〇・二〇一）の三人であるが吾々は此の三首を通してどのやうな「殯宮之時」の歌らしい共通の類型を求め得るであらうか。少くとも、當面の問題にしてゐる高市皇子尊の殯宮之時の挽歌に、他の二首に通ずる類型を求める事は困難である。今本歌の實體を考へる必要上煩を厭はず左に本歌全部を揭げることにしよう。（本文は澤瀉久孝氏萬葉集新釋に從ふ。）

かけまくも　ゆゝしきかも　いはまくも　あやにかしこき　あすかの　眞神の原に　久かたの　天つ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

御門を　かしこくも　さだめたまひて　神さぶと　岩がくります　やすみしゝ　わご大君の　きこしめす　背面の國の　眞木立つ　不破山越えて　高麗劍　和蹇が原の　行宮に　あもりいまして　天の下をさめたまひ　をす國を　さだめたまふと　鳥が鳴く　あづまの國の　みいくさを　めしたまひてちはやぶる　人を和せと　まつろはぬ　國ををさめと　皇子ながら　任けたまへば　大御身に　大刀とりはかし　大御手に　弓とり持たし　御軍士を　あどもひたまひ　とゝのふる　鼓の音は　雷の聲と聞くまで　吹きなせる　小角の音も　あた見たる　虎か吼ゆると　諸人の　おびゆるまでにさゝげたる　はたのなびきは　冬ごもり　春さりくれば　野毎に　つきてある火の　風のむた靡くが如く　とり持たる　弓はずのさわぎ　み雪ふる　冬の林に　つむじかも　いまきわたるとおもふまで　聞きのかしこく　引き放つ　箭の繁けく　大雪の　亂れて來れ　まつろはず　立ち向ひしも　露霜の　消なば消ぬべく　ゆく鳥の　あらそふはしに　度會の　齋宮ゆ　神風に　い吹きまどはし　天雲を　日の目も見せず　常闇と　覆ひたまひて　定めてし　みづほの國を　神ながら　ふとしきまして　やすみしゝ　わご大君の　天の下　まをしたまへば　萬代に　然しもあらむと　木綿花の榮ゆる時に　わご大君　皇子の御門を　神宮に　よそひまつりて　つかはしゝ　御門の人も　白妙の麻衣着て　埴安の　御門の原に　あかねさす　日の盡　ししじもの　いはひ伏しつゝ　ぬばたまのゆふべになれば　大殿を　ふりさけ見つゝ　鶉なす　いはひもとほり　さもらへど　さもらひえねば春鳥の　さまよひぬれば　嘆きも　いまだすぎぬに　おもひも　いまだ盡きねば　言さへぐ　百濟の原ゆ　神葬り　葬りいませて　あさもよし　きのへの宮を　常宮と　さだめまつりて　神ながらしづまりましぬ　然れども　わご大君の　萬代と　おもほしめして　つくらしゝ　香具山の宮　萬代に

すぎむともへや　天のごと　ふりさけ見つゝ　たまだすき　かけてしぬばむ　かしこかれども

短歌

ひさかたの天知らしぬる君故に日月も知らに戀ひ渡るかも

埴安の池の堤の隱沼のゆくへを知らに舍人はまどふ

讀み終つて誰にでも分ることは、本歌に類型とか形式とかいつたものを超えた或る獨自性のあることであらう。作者は殆ど休止らしい休止なしに一息に「神ながらしづまりましぬ」まで百三十六句うたひおろし、さてそこで一息入れて「然れども」と終りの十三行計百四十九句をうたひ切る。なるほどこのやうに終止形なしにうたひ續けるといふ事は周知の如く萬葉長歌のきまつた慣用法であるが、人麿がこのやうな長大篇にこの慣用法を徹底的に適用したといふことは慣用的な事ではない。そこに人麿の比類稀れな氣息の長さ、つまり精力的な精神力の强さと、うたひ續ける旋律の搖れ、つまり時間的な情感の動きが形成されてゐると言へよう。併しながら、その事は本歌に構想力や組織が缺けてゐる事を語つてゐるのでは無い。山田孝雄氏が「講義」で本歌を分析し段落を附けてゐるのはその意味で正しい。今、氏の段落に隨ふと本歌は凡そ次のやうに圖式化することが出來るやうである。（圖式化したのは稿者、なほ山田氏はつなぎとして前後にまたがる部分を設定して居られるが、本圖では便宜一方にくり入れた。）

なほ山田氏の說明に隨へば第一大段は高市皇子の功績より薨去に及ぶ客觀的記述、第二大段は人麿の皇子に對する感想卽ち抒情、第一段の中の第一中段は皇子在世中の事歷、第二段は薨去並びに葬儀。第一中段は更に第一、第二の小段に、第一小段は更に第一、第二の分段に、分段は節に、節は小節にと分れてゐる事正に圖式の通りであるが、さて吾々がここで特別に注意をしなくてはならない事はこのやうな整然たる組織にも拘らず組織の各部分が實に均衡を失してゐ

- 一篇
  - 第一大段（かけまくも―しづまりましぬ）
    - 第一中段（かけまくも―さかゆるときに）
      - 第一小段（かけまくも―みづほのくにを）
        - 第一分段（かけまくも―あらそふはしに）
          - 第一節（かけまくも―みたれてきたれ）
            - 第一節（かけまくも―よさしたまへば）　36
            - 第二節（おほみみに―みだれてきたれ）　36
          - 第二節（まつろはず―あらそふはしに）　6
        - 第二分段（わたらひの―みづほのくにを）　10
      - 第二小段（かむながら―さかゆるときに）　10
    - 第二中段（わごおほきみ―しづまりましぬ）
      - 第一小段（わごおほきみ―いまだつきねば）　28
      - 第二小段（ことさへぐ―しづまりましぬ）　10
  - 第二大段（しかれども―かしこかれども）　13

計　(149)

るといふ事である。量的に言つて敍事の第一段の百三十六句に對して抒情の第二大段は十三句、つまり後段は前段の一割弱といふ事になり、第一大段の中の二つの中段は前段が高市皇子の生前の事歴を語る爲に九十八句を費してゐるのに後中段はその死と葬儀を敍する爲に三十八句を費してゐるに過ぎない。そしてそのやうに順々にしぼつて行つた最後の第一、第二の兩小節で七十六句つまり全歌の五十一％といふ重量をかけて作者は壬申の亂の顚末を語るに餘念が無い。つ

まり本挽歌で人麿は全長の九割を割いて高市皇子の生前から死後の葬儀に渡る事蹟を客觀的に敍し、更にそのやうな皇子の事蹟を敍するに當つて五四%に渡つて壬申の亂を敍した事になる。尤も「殯宮之時の歌」にはその死者の生前の事蹟を敍するのが一つの慣例になつてゐたのだと一往考へられなくもないが、それにしては全く是と同類の挽歌とも言ふべき「日並皇子尊殯宮時」の歌にかうした構想が見えないのはなぜか。なるほど日並皇子には事蹟として高市皇子ほどに華々しいものが無かつたかも知れないが、苟も皇太子に立たれた皇子の事であるから、さうした儀禮用の事蹟を求めようとならばそれほど材料に窮しようとは思はれない。だのにこの歌の方は高市皇子の場合とは全然異なつた構想で作られてゐるといふ事は、高市皇子の挽歌のこのやうな構想が一般に「殯宮時歌」といふ儀禮的挽歌の慣用的構想とはあまり關係なかつた事を語つてゐるのであらう。してみればこの挽歌の構想の上のアンバランスといふ事は此の歌の持つ儀禮的慣用から解放されていゝ、もつと自由な作者の創作的事實でなくてはならぬ。

つまり作者は此の殯宮で高市皇子の死の歌を作るに當つて抒情よりも敍事に重點を置き、又皇子の事歴を語る爲に、特に不均衡な程度にまで壬申の亂を中心にしたといひ得よう。又皇子は此の作者にとつて感情や情緒であるよりもより多く行動であり意欲であつたとも言へよう。尤も本歌に求められる此の事實は作者人麿と無關係ではない。ないばかりか人麿の獨自な個性に必然な關聯を持つてはゐるが、同時に又壬申の亂といふ高市皇子が體驗した爭亂そのものとも不可缺な關聯を持つ。人は壬申の亂無しに此の挽歌を持つことが出來なかつた。もつと言へば此の歌を理解する爲には作者人麿が必要であると同樣に壬申の亂が必要であり、又人が壬申の亂といふ歴史的事實を理解し得る程度は少くとも此の歌を理解し得る程度を測る一つの尺度でなくてはならないのである。尤もこの事は逆に一つの歴史として壬申の亂を知らうとする人々（たとへば歴史學者のやうな）にとつては本歌を感知する程度が亂を知る程度を測る一つの尺度と見なす事も出來るといふのと全く同じ事である。

本歌にはうたひ出しの「かけまくも」から第百三十六句目の「しづまりましぬ」まで無休止の文脈が一筋の川の流れか何かのやうに流れに流れて居り、この事が前にも言及したやうに既にたゞならぬ出來事であるが、中でも第二小節で高市皇子が大御身に太刀取りはかし、大御手に弓取り持たしてたゝかふ三十六句はこの程度に高度の文化を持つた時代にはとても豫想する事の出來ないエネルギーの蓄積と氾濫であつて、もしこれを人麿の異常な個性的天才に歸せしめるべきであるとすれば、同時に吾々はよく此のやうな天才を生み得た歴史的な何ものかを彼の背後に想見しなくてはならないであらう。そして此の何ものかこそ、このやうな文化社會にもう一度英雄時代の殘照を再現させたところの壬申の亂それ自體でなくてはならないのである。史家が言つてゐるやうに我が民族の英雄時代は――もしあつたとすれば――白鳳文化の時代を溯る事既に一時代前である。併しながら英雄時代を現出したあの民族的エネルギーは決して消耗し盡くされた譯ではなく、大陸傳來の諸文化の渦卷を潛るやうにして、或は之に抵抗し或は之を燃燒させつゝ現代へ生き續けて行つたので、このやうなエネルギーが政治的混亂のはずみを喰つて一時的にぱつと再び英雄時代の焰をあげた、とでも言ひたいのが壬申の亂であり、それを人麿の天才によつて行動と意欲に充ちた高市皇子の生像に再生したのがこの挽歌なのである。

壬申の亂に關聯して、もう一つ歴史的基盤の具體的實例として本歌で考へられる事は「わご大君」と「舍人」の對稱に就てである。一體この種の挽歌で、主人公は二人稱として呼びかけられてゐるのか、それとも三人稱として語られてゐるのか。嚴密にはこゝにも問題は殘ると思はれるが、いづれにしても、本歌で高市皇子の事は「わごおほきみ」又は「きみ」と呼び、之に對して作者は自稱を「舍人」と呼んでゐるやうである。尤も長歌の中で一人稱例へば「過ぎむともへや」とか、「天のごとふりさけ見つつ、玉だすきかけてしぬばむ」とか言つた風に省略されてゐるが、短歌第二首の方で「ゆくへを知らにとねりはまどふ」と言つたのは、これも强ひて三人稱ととれなくはないけれども一番穩かなの

はやはり山田氏の講義のやうに「われら一同」といつた風に舍人の一人として自分を意識してゐる姿であらう。とにかく、「わごおほきみ」又は「きみ」と「とねり」とが本歌で廣義に對稱をなしてゐることはまちがひない。特に短歌で、前歌に「君故に」といつて「戀ひわたるかも」の主格を省き、後歌で「まどふ」の主格として「舍人」はと言つてゐるのは山田氏も言及して居られるやうに、兩歌は獨立したそれ〴〵の短歌といふよりも「相待ちて意を完うせるもの」といひたい關係にあり、さうすればこの「君」と「舍人」とも半ば意識して前後二首に配して相對せしめたものと考へられる關係にあると言へよう。もしかういふ風に本歌の主人公である高市皇子が「わごおほきみ」であり、作者である人麿が「舍人」であるといふ關係が意識されてゐたとすれば、この挽歌に吾々は一つのはつきりした史的基盤を豫想しなくてはならない事になる。

一體嚴密に言へば、文學的作品に於てすべての語彙は單なる觀念語ではなく必ず多少の意味に於て歴史的背景を持つてゐる筈である。例へば人麿がこゝの短歌で「久堅の天知らしぬる」といつた時の「久堅の天」と、同じ人麿が「日並皇子尊」の挽歌の反歌（二六八）で「久堅の天見る如く」と言つた時の「久堅の天」とでは、同じ「ひさかたの天」でも使つた時處の相異から來る意味のずれは當然あるべきであるが、吾々はそのやうな一々の語彙についての意味のずれを感知せず、或は感知しても之を一々せんさくしないでそのまゝに放置するのを常とする。併しながら、この「わごおほきみ」と「舍人」との對稱のやうに主人公と之に對する作者といつた重要な關係をあらはす語彙にあつては、それ等の言葉の意味の背景をなす歴史的基盤は看過されてはならないのである。即ち壬申の亂で天武天皇の側にあつて勝利のにぎひ手となつたものは天皇を始めとして皇后、高市皇子日並皇子以下の一統即ち「わが大君達」と之を支持して終始奮鬪した舍人達とであつたが、本歌で人麿が高市皇子を「わごおほきみ」と呼び自分自身を「舍人」と呼んでゐるのは正にかうした謂はば「壬申の亂」の意味に於てであつて、決して單なる辭書的な觀念語としての意味に於てではなかつたの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com